HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Klaus Riesenhuber,Existenzerfahrung und Religion
Author(s)	近野, 亘
Citation	基督教学, 8, 34-38
Issue Date	1973-07-10
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/46292
Type	other
File Information	8_34-38.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

書評

Klaus Riesenhuber

Existenzerfahrung und Religion

Matthias-Grünewald-Verlag
1968. 120 pp.

「神の死」を告げたニーチェの予言は、おそらく彼自身の意図をはるかに越えて、現代適中している。過去のいかなる時代にもまして、それは根深く、はば広く、「神不在」は「現代の常識」となっている。「神は在るか」の問いはおろか、「神について」の言表はみあたらず、「神へ」の語りかけもすくない。「神なしの宗教」「神なしのキリスト教」すら生まれる。本書の著者のみならず、現代ヨーロッパの神学や哲学が、こうした状況の中で、あらためて「神」をめぐる問題を、自己反省的に中心的課題としていることはなにを物語るものなのか。過去においては、「神」ということばには、肯定にしろ否定にしろ、共通の理解の場があったし、あるいは、聖トマスの集大成ではあっても、そこには、すでに「存在している神」についての論争でしかなかった。しかし、いわゆる「世俗化」された現代は、いかにキリスト者が、「自分が理解し、信じている神」について人びとに語りかけようとしても、それを受けとめるアンテナはない。「この世界には、すでに神のためには一席もない。」こうした現代の状況は、啓蒙思想につちかわれた十九世紀的な合理主義の申し子であり、現代の技術文明はまたそれをさらにかりたてる。

しかし、いわゆる「第一の啓蒙」から「第二の啓蒙」を経た今日、人間性への無条件的な信頼に対する反省や、科学技術的進歩が無条件的に善であるとはされず、そこから生ずる深刻な不安も現代を特色づけていることも事実である。したがって、自分の信仰を人びとに伝えようとするものにとって、一方、「神」ということばで、自分は「何」を理解し、理解させようとするのか、という反省と、他方、現代人が「不安」として経験していることを吟味し、人間学的な問題の立てかたをすることによっ

て、「神」についての対話の場が開かれてはこないのか。現代の神学や哲学の中心的課題のひとつが、あらためて「神」をめぐる問いにある、とするのはいわれのないものではない。

マチアス・グリューネヴァルト社刊の〈Unser Glaube〉五巻中の第二巻として、「キリスト教の今日的理解」のために書かれた本書は、現在、上智大学文学部哲学科で宗教哲学を講じておられる著者が来日される前に出版されたものであるが、「神」についての哲学的考察として、人間の主体性や実存的状況の分析を通して、人間の経験のなかに、「神」の経験の場があることを示そうとする。それは伝統的な「神存在の証明」ではないが、経験は証明より力がある、と著者は述べている。

現代人は、きわめて人間中心的であり、人間の経験を重んずる。神や宗教について語ろうとする場合にも、したがって、伝統的な方法よりも、人間の経験に根をおろしたものでなくてはならない。神・信仰・宗教というものの基本的構造を実存的状況の中で示さなければならない。全体として四章から成る本書の第一章は、「宗教哲学的な問い」として、現代の精神状況を述べながら、その由来について歴史的な回顧を与えつつ、宗教についての現代までの批判に答えうるような神の認識の合理性を、方法的論的に述べられている。第二章は、「神の呼びかけ」として、人間経験の中での神の現存とその合理的な認識について、きわめて人間学的な分析がなされていると思われる。第三章では、宗教的行為の起源・構造・内容が示され、最後の章では、啓示とのかかわりが考察される。紙数の関係上、現代、同種の問いかけがなされている幾つかの労作に共通した「神の問題として」の「意義の問題」について若干述べてみたい。

現代人の関心は、死とか罪とかの実存的不安から宗教への道程より以上に、個々人の生存や歴史の「意義」に寄せられている。W. Kasper; Glaube und Geschichte, Einführung in den Glauben, 中の諸論、L. Boros の諸著作、あるいは J. Moltmann; Theologie der Hoffnung などに一貫してみられるもの、そして、E. Bloch などのマルキシストとの対話の場を開いているものも、「意義」をめぐる問題であらう。E. coreth が Gottesfrage heute

や、Atheismus kritisch Betrachtet の中で述べるように、あらゆる無神論といわれる諸説の根底には、現実の意義の肯定があり、意義の要求がある。本書の著者も、「経験における神の現存」の中で、「実存的経験」としての「意義」の発見と「神」との出会いを強調する。

人間は行為によって自己自身を規定するものであるが、誰にも、生涯の或る時期に、少なくとも或る一定期間のために、日常的な他の諸行為以上に価値がある（少なくともそう思われる）決定をせまられる岐路に立つ経験を持つ。いわゆる「世界内存在」としての人間にとって、その決定は、自己の世界を形成することであり、そのことは、自己自身の生存の意義につながる。意義の発見と把握によって人間は、自己を全的にその中で充足させうるし、反対に意義の経験のない場合には、実存の空虚さのみが残る。ところで、この「意義」なるものは、単なる道徳法の命令にしたがったことによって経験されるようなものではない。「べき」ことをも包含してはいるが、むしろ或る「声」に向けて自己を決断したことによって味わう「これでよい」という安心感と充足感を伴った、何かしら「人格的」な出会いの経験である。そして、一度この「意義」を経験し、それが自己の中心に据えられるとき、あらゆる経験がその中で統一され、あらゆる行為が、その「意義」のためであり、また、あらゆる行為が、その「意義」から価値づけられてくる。そして、これからの道程に、いかなる困難があらうとも耐え抜こうとする態度も附随してくる。それは、幸福・希望・愛ということばでも表現しうるような経験である。

しかし、人間のおかれている状況は種々ある。それらの中で、人間は、自己に可能な諸善のうちから、ひとつを選択し決定して行く。そのことは、「意義」と呼ばれた「自己の中心」の選択・決定においても同様である。つまり、「意義」も、その人間にとって可能な諸善、あるいは諸意義のひとつにすぎず、おかれた諸状況のひとつにすぎない。「その意義」のみが、唯一の、あるいは特殊な可能性として与えられていたわけではないし、「その意義」をもたらす状況や行為も、他の多くものとともにあった、それらのうちのひとつにすぎない。それにもかかわらず、「選びとられた意義」には、なにかしら「絶

対的」な性格が経験される。つまり、「意義」は、具体的な諸可能性の中で、そしてその中でしか経験されないが、「意義」自体は、諸可能性、諸状況自体ではない。「意義」の「絶対性」は、「超越性」の経験につながってくる。おかれた状況のなかで、自己超越しようとするときに経験されるこの「意義」はまた、その状況の中にあって、その状況へと招き寄せ、その状況へと決断をうながすような、「人格的な出会い」の経験でもある。

ところで、こうした実存経験としての「意義」こそが、宗教家が「神」ということばであらわして来た現実である、と著者は述べる。したがって、「意義を経験しているものは、神を経験している。」もちろん、「意義」の持つ「絶対性」、「超越性」、「人格性」にはさらに合理的な論証が加えられねばならないが、それは、単なる推理的なものであってはならない。（この点については、第一章参照）いずれにしても、「意義」が実存の経験であるということは、何びとも異論はないであらうか。意義経験の全くない場合があるであらうか、と著者は問いかけている。それには、実存のさらに深い分析が必要である。

人間には、いかなる状況にあっても、現実にはひとつの意義があるという先験的な認識がありはしないか。人間には、如何なる場合にも、意義への要求がある。個人的な状況であれ、歴史的な状況であれ、（W. Kasper は、この問題を取りあげている。）人間には、「にもかかわらず、»Dennoch«」がある。それは、いつも人間の状況の中にあって、状況へと決断をうながし、呼びかけ、招き寄せる「声」として、人間の実存に先立っている。それは、人間の側からは、意義への要求として経験される。だから、「意義」が「意義」として経験されないとしても、何らかのかたちで、それは実存とともにある。そして、おそらく「意義」の明白な把握は、実存の主体的な決断にかかるところが大であらう。

「意義の問題」が「神の問題」であるとする著者やその他の人びとには、先験的方法というひとつの立場があるであらうが、それは、少ないページの本書では充分に扱い得ない問題であろう。それは、K. Rahner, J. B. Lotz, E. Coreth のような人びとの労作に負うところが多い。それはまた、本書の第四章における「啓示」への人間の要

求の問題として扱かわれる。そこではじめて、著者のいわゆる「宗教哲学」が完成するのではなかろうか。

本書は、一二〇頁という短かいものではあっても、現代における宗教哲学の方向を示すものとして貴重なものであらう。スコラ神学、哲学という分野での労作として、先験的方法や存在論についての知識を前提にしながら一読にあたいするものである。ちなみに、著者には、カトリック神学、第二十二号に、ペレス師が書評を寄せられた

Die Transzendenz der Freiheit zum Guten. Der Wille in der Anthropologie und Metaphysik des Thomas von Aquin. München, Berchmanskolleg Verlag, 1971, 411 pp.

があることを附記しておく。

（近野　亘）

昭和四十七年度行事報告

○第十一回大会　七月十日　於・北海海大学

理事会

総会

昭和四十七年度行事、会計、会計監査報告を承認

決議事項

一、新役員として次の各氏を選出。

〔会　長〕秋田　稔

〔会計監査〕海老沢義道

〔理　事〕浅井正三、石沢三郎、伊藤貫一、宇野光雄、大出　哲、加藤邦雄、佐藤日吉、三原武夫、山崎保興

〔幹　事〕雨貝行麿、植木幹雄、近野　亘、白井暢明、滝沢武人、土屋　博

二、公開講演会は来日予定のH・コックス氏を講師として招くことの可能性を打診する。

三、次期大会は七月十六日(月)、酪農学園大学において行なう予定とする。

四、「基督教学」第八号の編集委員として次の各氏を選出。浅井正三、荒川関巧、宇野光雄、大山綱夫、加藤邦雄、近野亘、白井暢明、菅沼英二、滝沢武人、土屋博、山崎保興

五、前本学会会長・中川秀恭氏の本学会の創設並びにその後の御貢献に対し、「名誉会長」の称号を贈ることが決定された。